



山形県におけるオウトウ病害虫防除暦の考え方

山形農業総合研究センター 園芸農業研究所 後藤 新 一

はじめに

2025年度の山形県におけるオウトウの収穫量は8,310 tと全国第1位で国内収穫量の約74%を占める（農林水産統計情報，2025）。品種別では‘佐藤錦’が約68%と主力品種となっており，次いで晩生種の‘紅秀峰’，早生種の‘紅さやか’等の栽培が行われている。また，2023年には大玉新品種である‘山形C12号’（商標名：‘やまがた紅王’）の本格販売が開始され，品種の多様化が進んでいる。栽培様式別では雨除け栽培が主体となっており，その他では施設栽培（加温栽培，無加温栽培）や露地栽培が行われている。オウトウをはじめ，県内で栽培されている農作物の病害虫防除に当たり，山形県では毎年，「農作物病害虫防除基準・除草剤使用基準・植物生長調整剤使用基準」（以下，県病害虫防除基準という）を策定し，指導を行っている。果樹については，本シリーズで既に紹介したブドウの県病害虫防除基準と同様に防除暦形式とし，「防除時期」，「対象病害虫」，「防除方法」等について取りまとめている（後藤，2025）。本報では，現在の山形県におけるオウトウの県病害虫防除基準の特徴と作成にあたっての考え方を解説する。

I 山形県病害虫防除基準の作成

1 県病害虫防除基準作成の歴史

山形県におけるオウトウ防除暦は，現行の「県病害虫防除基準」の名称で1962年から作成され，当時は缶詰等の加工向け生産（露地栽培）を主体とした防除暦であった。その後，雨除けハウス栽培の普及に伴い，生食用の生産が主体となったことから防除暦も雨除け栽培の‘佐藤錦’を主体とした防除暦へ移り変わっている。

2 県病害虫防除基準編成体制および作成スケジュール

県病害虫防除基準の策定にあたっては，毎年，県の行政機関，各試験研究機関，病害虫防除所の担当者から構

成される策定会議において，生産現場で問題となっている病害虫に対する防除対策や各JAや出荷組織等の関係団体からの要望事項を踏まえ検討している。また，発行に際し，農薬使用基準の誤記載を防止するため，前述の県関係機関が連携し，記載されている全農薬の使用基準について三重点検を行っている。

本県では毎年2月末ごろに県病害虫防除基準を発行している。まず，作成にあたり4月に最初の策定会議を開催し，前年の積み残し事項等を関係者間で共有するとともに，10月に開催される各部門別の専門部会での改訂に向けて原案の作成を行う。次に8～9月にかけてJA等の関係団体や県農業技術普及部門を通じて，生産現場で問題となっている病害虫や県病害虫防除基準に対する要望事項を集約し，その後10月の各専門部会で，各要望事項等について協議する。11月の策定会議で協議結果を確認後，原稿の修正を行い，12月から翌年1月にかけて，県関係機関（行政機関，試験研究機関，病害虫防除所）で掲載されている農薬の使用基準等について三重点検を行う。三重点検後の指摘事項等について，確認，原稿修正し，2月末ごろに印刷，発行するとともに，県が運営する農業情報サイト（やまがたアグリネット（通称：あぐりん））で会員（2026年3月末現在7722名）向けに公開する。

II オウトウ防除暦作成にあたってのポイント

1 オウトウ防除暦の構成

前述のように，現在，オウトウの県病害虫防除基準では，県内の主要栽培様式である雨除け栽培の‘佐藤錦’を対象とした防除暦を作成している。2026年のオウトウの県病害虫防除基準の記載概要は表-1～5のとおりである。防除暦では，「防除時期（生育ステージ）」ごとに「対象病害虫」，「防除方法（使用薬剤，希釈倍数等）」，「注意事項」について記載している。また，防除暦の冒頭には，掲載薬剤の一覧を設け，使用基準やRACコードを示し，誤使用，使用基準違反の防止を図るとともに，耐性菌および抵抗性害虫出現防止の注意喚起を行っている。特に蚕毒や魚毒性の高い薬剤については，防除暦中

The Concept of a Cherry Pest Control Calendar in Yamagata Prefecture. By Shinichi Goro

（キーワード：山形，オウトウ，病害虫，防除，防除暦）